細木数子番組の人気と、この国の不幸な宗教文化

國學院大學教授
石井研士

二〇〇六年三月、日本物理学会において「ニセ科学」に関するシンポジウムが開催された。ニセ科学とは「科学的に明確に否定されているのに『科学らしく』宣伝されている事柄」のことである。具体的にいえば、マイナスイオンや血液型性格判断がそういったもので、最近では「水」に関する風説も広がっている。「ありがとう」とか「平和」という言葉を見せた水で結晶を作ると水はきれいな結晶を作り、「死ね」とか「戦争」といった言葉を見せた水はきれいな結晶を作らないというのである。

こうしたなかでもとくに血液型性格判断への関心は高い。世論調査やアンケート調査でも格段に高い関心が示される。國學院大學二一世紀ＣＯＥプログラムで行った調査では、「血液型と性格とは関係がある」と回答した者が、二〇代で五割近かった。

血液型性格判断番組と放送倫理

二〇〇四年一二月に、放送倫理・番組向上機構（以下ＢＰＯ）は、視聴者からの意見を元に血液型性格判断を扱うテレビ番組も検討し、放送局に対して要望を行った。ＢＰＯは、放送番組による人権侵害を救済し、放送倫理の高揚に寄与することを目的としてＮＨＫと民放が設立した第三者機関である。

ＢＰＯが放送局に対して要望を行ったのは、視聴者からのクレームが多くなったためである。血液型と性格は本来関係がないにもかかわらず、番組の中であたかもこの関係に科学的根拠があるかのように装うのはおかしい、といったものをはじめとして、学校で血液型のためにいじめられたとか、就職で血液型による差別意識が生じているという指摘が要望書の提出に決定的な影響力を持った。

ＢＰＯは放送各局に対して「自局の番組基準を遵守し、血液型によって人間の性格が規定されるという見方を助長することのないよう要望する。占い番組や霊感・霊能番組などの非科学的内容の取り扱いについて、青少年への配慮を一段と強められるよう要請したい」と要望したのであった。

ＢＰＯがこうした判断を下す際に根拠としたのは、民間放送連盟の放送基準である。放送基準「第八章 表現上の配慮」の五四条には「占い、運勢判断およびこれに類するものは、断定したり、無理に信じさせたりするような取り扱いはしない」と記されている。同条の解説としては「現代人の良識から見て非科学的な迷信や、これに類する人相、手相、骨相、印相、家相、墓相、風水、運命・運勢鑑定、霊感、霊能等を取り上げる場合は、これを肯定的に取り扱わない」と記されている。この点に従って、放送内容が不適切と判断したのである。その後血液型の番組は潮が引くようになくなっていった。

高視聴率をとる占いバラエティ番組

しかしながらテレビ局は、現在も依然として非科学的事柄に関する放送を続けている。超能力捜査官、心霊写真、霊との交流を中心とした番組などかなりの数にのぼる。そうした中、人気占い師の細木数子の番組でしばしばトラブルが生じている。

二〇〇五年七月四日（日）午後九時からＴＢＳで放送された「史上最強の占いバトル細木数子vs.ウンナン超有名人一〇〇人怒濤の運命メッタ斬りＳＰ」は、六月二八日（月）～七月四日（日）の週に放送された、報道、教育・教養、音楽、ドラマ、アニメ、映画、スポーツ、娯楽番組に分類されてい

高視聴率を稼ぐ細木数子のテレビ番組

る全番組の中で、もっとも高い視聴率を獲得した（二五・二％）。翌週七月一〇日（土）に日本テレビで放送された「THEスペシャルー・細木数子&みのもんた絶対ー幸せになろうよ」も同様に、その週のもっとも高い視聴率を獲得したのだった（二一・七％）。内容は酷似している。占い師の細木数子が、若手の俳優に対して「近々自殺の要素あり」と断言して見せたり、結婚したばかりの芸能人に「ぜったいに離婚する」と述べるなど、占い師でなければたんなる個人的な誹謗中傷に当たるかもしれない内容に終始している。

BPOは二〇〇五年度に放送局に対して八件の回答要請を行っている。そのうちの三件（一〇月）が細木数子をメインキャラクターにすえた番組である。番組は「ズバリ言うわよー」（TBS）、「幸せって何だっけ」（フジテレビ）、「愛のエプロン 2005秋SP」（テレビ朝日）の三つである。三つの番組に対する回答要請は同じ内容であった。「この女性占い師をメインにした番組を制作する意図」、「局にどのような視聴者意見が寄せられているか。それらをどう受け止めているか。また、それについての社内議論はあったのか」、「占い師の発言は、〝占い〟を根拠にしたものか否か」、「『テレビ番組以外の場での彼女の活動や収入を、放送局が結果的に支えることになるのは問題ではないか』という意見に対する局の見解」である。

紙数の都合上「占い師の発言は、『占い』を根拠としたものか否か」に対するテレビ局の回答を示すと以下のようになる。「この番組は細木氏が日本各地で開いてきた勉強会（悩み相談）の経験がベースになっており、細木氏による『占い』ではなく、その勉強会で培った『人生観』が発言、番組主旨の根拠になっております。したがって、『占い』により番組を構成、進行しているものではございません」（TBSテレビ）、「細木さんには、世事に対する経験を生かしてコメントをしていただくことで希望と勇気をもってもらいたい、という番組の企画意図に基づいてご出演いただいております」（フジテレビ）、「細木氏の発言は三時間の番組中、ほとんどが料理バラエティ番組における細木氏の料理に関する発言であり、基本的には占いに基づくものではなかったと考えております。占いをもとに発言したのは『料理占い』というコーナーのみで、その内容も細木氏の占い理論に沿って、どんな料理を食べたら運気が上がるかなどを出演したタレントに告げるというものでした。これらは公序良俗に反するものではないと判断しております」（テレビ朝日）。放送局の回答は、どのように好意的に捉えても、詭弁としか思えない。

番組審議会の形骸化

局内の番組審議会で取り上げることを約束したのはTBSテレビだけだった。審議会は要請のあった翌月に開催された。ホームページに掲載されている議事録を読んで二度驚愕した。

最初の驚きは審議会での予想外の批判であった。「細木さんが、なぜ説明も占いのプロセスもなしで、『西郷さんが大殺界に入ったから自殺する』という方に持っていくのか、まったく理解できなかった。もし本当に人生相談ならば、『自殺』という言葉は出さなくても、さまざまな材料から辛口のコメントをすることはできたはずだ」、「既にBPOから出されている要望書（「血液型の取り扱い」など）も、制作者はどうか頭の片隅に置いてほしい。かつてTBSで起きた問題の時も、いろんな指針が出来たが、形の上だけでは余り意味がない」（二〇〇五年一一月二一日／第四八一回番組審議会）。今一度の驚きは、批判が相次いだにもかかわらず審議会に結論がなく、番組が現在まで同じ調子で（と錐者は思っている）継続されていることである。加えてBPOは、そうした放送局の対応に対して、さらなる回答や要望を求めないのである。だとしたら、要望書も審議会も必要ない、と思うのは私だけだろうか。

フジテレビは「メディア検討小委員会」での検討を回答したが、委員会での議論はHPでは公開されていない。テレビ朝日では検討された様子がまったくみられない。

細木数子をめぐるトラブルはまだ続く。「幸せって何だっけ」（フジテレビ・二〇〇五年一一月一一日）で大失言をしたのである。番組の中で細木は鶏卵の価格の安さを批判して、養鶏場では二四時間明かりをつけ一日に二、三個も卵を産ませている、ほとんどが薬でつくられている、などと事実とは異なった発言をしたのであった。細木の発言に対して、日本養鶏協会や日本卵業協会など養鶏業界一一団体が連名でフジテレビに抗議を行った。フジテレビは謝罪し、翌年一月に訂正番組を放送した。

インターネット上では、細木数子の失言や当たらない占いは今に始まったことではないというホームページが複数存在する。谷という姓になったら田村亮子は金メダルをとれない、ライブドアの株価が五倍になる、二〇〇六年のセ・リーグは阪神、横浜、巨人が優勝争い、小泉さんの次は武部さん、など知られているだけでもかなりの数に上るという。

超能力番組への不思議な寛容さ

細木数子やその他一連の非科学的事柄に関する番組を見ていて不思議に思うのは、無関心の存在である。血液型性格判断の番組では、一部の視聴者が子どものいじめを訴えて番組の中止にいたったが、大半の視聴者にとっては、なぜ問題となるか理解できなかっただろうし、そもそも理解すらしようとしなかったのではないか。占いについても、多くの放送局で頻繁に流されているように、一部の視聴者を除いては、かくだん事を荒立てる必要のないものである。日本PTA全国協議会は毎年「子供に見せたくない番組」を公表しているが、取り挙げられている番組は性と暴力に関するもので、非科学

的事柄に関する番組はひとつも入ったことがない。暴力シーンや性描写に関しては神経をとがらせるものの、心霊写真の特集、超能力捜査官による不明者の捜索、スピリチュアル・カウンセラーによる霊視、前世の記録などに関しては、実に寛容なのである。

こうした無関心さ、寛容さは、制作者、放送局、視聴者だけではない。宗教者や宗教団体、その連合体も同様である。

若者の間に高まる霊や超能力への関心

私が考えているのは、根拠のない非科学的番組が流され続けていることが問題である、ということではない。そうではなくて、この国の不幸な宗教文化についてである。バラエティ番組として位置づけられた、かなり扇情的な非科学的番組が横行している。それも近年始まったことではなく、昭和四〇年代に始まり、すでに三〇年以上の「伝統」を持っているのである。おそらく、バラエティとして極端な表現様式と内容を与えられた番組は、放送法に謳っている「公安及び善良な風俗を害しないこと」に反している。

他方で、宗教団体が提供する番組に対しては、過度の規制がかかっているのである。しかも、この規制は明文化されず、実際の放送制作過程の中で、局から言い渡されるのである。たとえば、予言をしない、病気が治ると言わない（たとえ聖

宗教団体が提供する番組で、霊の存在を訴えたり、霊からのメッセージを受け取ったり、あるいは悪霊退散の儀式を行うなどはもっての外だろう。万が一放送されたとしたら、たちまちクレームが殺到するのではないか。

戦後の日本人の宗教意識・宗教行動の変化を考慮すると、テレビで非科学的事柄に関する番組が平然と放送されていることの問題を理解することができる。戦後における日本人の宗教行動・宗教意識の変化を調べると、伝統的な宗教性が大きく減退したことがわかる。戦後「信仰有り」の割合は六割から三割へと低下し、神棚は全国平均で五割を切り、仏壇も六割に減少した。家庭や日常生活から伝統的な宗教に対する関心や意識が後退していく中で、若者の間では、霊や超能力に関する関心が高まっているのである。

二〇〇四年六月、長崎県佐世保の小学六年生の女子児童が同級生をナイフで刺し死亡させる事件が起こった。家庭裁判所最終審決は加害児童の「死のイメージ」が希薄であることを指摘する一方で、ホラー映画や恐怖小説の影響を受けていることを指摘した。長崎県は最終審決の内容を受けて、同年一一・一二月に「児童生徒の『生と死』のイメージに関する意識調査」を実施した。その結果「死んだ人が生き返ると思いますか」という質問に対して全体で一五・四％が「はい」と肯定回答を示した。「生き返る」と回答した理由としてあ

るから」など、メディアの影響の大きさをうかがわせるものであった。

精神文化が薄まっていることへの危惧

こうして順に考えてくると、次にやるべきことは、テレビ番組が子供や青少年に与える影響について調査することである。テレビを見たからといって、そのまま影響を受けるわけではないだろう。反感を覚えることもあるにちがいない。マス・メディアの効果研究でいう弾丸理論（マスコミが大衆に流す情報は弾丸が撃ち込まれるかのように強力に受けとめられる）は疑わしい。それでも影響があるだろうことは容易に想像できる。

しかしながらここに大きな壁が存在するのである。宗教的な質問を含んだ調査を行政が認めないのである。筆者は、二〇〇六年八月に豊島区と渋谷区の小・中学校を対象に、長崎県のアンケートに数問のテレビと宗教に関する設問を含んだアンケート調査の実施許可を担当局に願い出たが、許可されなかった。長崎県での経緯を説明しアンケートの内容に関しては、検討の余地を残したのにもかかわらずである。許可されなかった理由は、学校教育で扱っていないから、であった。行政もまた無関心である。

この国の宗教文化が、家庭や地域社会から失われていき、学校でも扱われず、ヴァラエティ番組として存続していくことに大きな危惧を感じざるをえない。宗教は精神文化の中枢をなす濃い文化である。文化の薄まりは、至る所に現れているのではないだろうか。

石井研士（いしい・けんじ）
▼一九五四年東京都生まれ。東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専攻博士課程単位取得満期退学。東京大学助手。文化庁宗務課専門職員を歴任。現在、國學院大學神道文化学部教授。博士（宗教学）。現代社会と宗教とのかかわりを研究テーマとし、とくに戦後日本人の宗教性の変容の問題を扱う。主著書に『銀座の神々』『データブック現代日本人の宗教』（ともに新曜社）、『結婚式――幸せを創る儀式』（NHK出版）ほか多数。

的事柄に関する番組はひとつも入ったことがない。暴力シーンや性描写に関しては神経をとがらせるものの、心霊写真の特集、超能力捜査官による不明者の捜索、スピリチュアル・カウンセラーによる霊視、前世の記録などに関しては、実に寛容なのである。

こうした無関心さ、寛容さは、制作者、放送局、視聴者だけではない。宗教者や宗教団体、その連合体も同様である。

若者の間に高まる霊や超能力への関心

私が考えているのは、根拠のない非科学的番組が流され続けていることが問題である、ということではない。そうではなくて、この国の不幸な宗教文化についてである。バラエティ番組として位置づけられた、かなり扇情的な非科学的番組が横行している。それも近年始まったことではなく、昭和四〇年代に始まり、すでに三〇年以上の「伝統」を持っているのである。おそらく、バラエティとして極端な表現様式と内容を与えられた番組は、放送法に謳っている「公安及び善良な風俗を害しないこと」に反している。

他方で、宗教団体が提供する番組に対しては、過度の規制がかかっているのである。しかも、この規制は明文化されず、実際の放送制作過程の中で、局から言い渡されるのである。たとえば、予言をしない、病気が治ると言わない（たとえ聖書でイエスが病者を治したという話でも放送できない）など。宗教団体が提供する番組で、霊の存在を訴えたり、霊からのメッセージを受け取ったり、あるいは悪霊退散の儀式を行うなどはもっての外だろう。万が一放送されたとしたら、たちまちクレームが殺到するのではないか。

戦後の日本人の宗教意識・宗教行動の変化を考慮すると、テレビで非科学的事柄に関する番組が平然と放送されていることの問題を理解することができる。戦後における日本人の宗教行動・宗教意識の変化を調べると、伝統的な宗教性が大きく減退したことがわかる。戦後「信仰有り」の割合は六割から三割へと低下し、神棚は全国平均で五割を切り、仏壇も六割に減少した。家庭や日常生活から伝統的な宗教に対する関心や意識が後退していく中で、若者の間では、霊や超能力に関する関心が高まっているのである。

二〇〇四年六月、長崎県佐世保の小学六年生の女子児童が同級生をナイフで刺し死亡させる事件が起こった。家庭裁判所最終審決は加害児童の「死のイメージ」が希薄であることを指摘する一方で、ホラー映画や恐怖小説の影響を受けていることを指摘した。長崎県は最終審決の内容を受けて、同年一一・一二月に「児童生徒の『生と死』のイメージに関する意識調査」を実施した。その結果「死んだ人が生き返ると思いますか」という質問に対して全体で一五・四%が「はい」と肯定回答を示した。「生き返る」と回答した理由としてあげられたのは「テレビや映画等で生き返るのを見たことがあ

るから」など、メディアの影響の大きさをうかがわせるものであった。

精神文化が薄まっていることへの危惧

こうして順に考えてくると、次にやるべきことは、テレビ番組が子供や青少年に与える影響について調査することである。テレビを見たからといって、そのまま影響を受けるわけではないだろう。反感を覚えることもあるにちがいない。マス・メディアの効果研究でいう弾丸理論（マスコミが大衆に流す情報は弾丸が撃ち込まれるかのように強力に受けとめられる）は疑わしい。それでも影響があるだろうことは容易に想像できる。

しかしながらここに大きな壁が存在するのである。宗教的な質問を含んだ調査を行政が認めないのである。筆者は、二〇〇六年八月に豊島区と渋谷区の小・中学校を対象に、長崎県のアンケートに数問のテレビと宗教に関する設問を含んだアンケート調査の実施許可を担当局に願い出たが、許可されなかった。長崎県での経緯を説明しアンケートの内容に関しては、検討の余地を残したのにもかかわらずである。許可されなかった理由は、学校教育で扱っていないから、であった。行政もまた無関心である。

この国の宗教文化が、家庭や地域社会から失われていき、学校でも扱われず、ヴァラエティ番組として存続していくことに大きな危惧を感じざるをえない。宗教は精神文化の中枢をなす濃い文化である。文化の薄まりは、至る所に現れているのではないだろうか。

石井研士（いしい・けんじ）
▼一九五四年東京都生まれ。東京大学大学院人文科学研究科宗教学・宗教史学専攻博士課程単位取得満期退学。東京大学助手。文化庁宗務課専門職員を歴任。現在、國學院大學神道文化学部教授。博士（宗教学）。現代社会と宗教とのかかわりを研究テーマとし、とくに戦後日本人の宗教性の変容の問題を扱う。主著書に『銀座の神々』『データブック現代日本人の宗教』（ともに新曜社）、『結婚式――幸せを創る儀式』（NHK出版）ほか多数。

る全番組の中で、もっとも高い視聴率を獲得した（二五・二％）。翌週七月一〇日（土）に日本テレビで放送された「THEスペシャルー・細木数子&みのもんた絶対ー幸せになろうよ」も同様に、その週のもっとも高い視聴率を獲得したのだった（二一・七％）。内容は酷似している。占い師の細木数子が、若手の俳優に対して「近々自殺の要素あり」と断言して見せたり、結婚したばかりの芸能人に「ぜったいに離婚する」と述べるなど、占い師でなければたんなる個人的な誹謗中傷に当たるかもしれない内容に終始している。

BPOは二〇〇五年度に放送局に対して八件の回答要請を行っている。そのうちの三件（一〇月）が細木数子をメインキャラクターにすえた番組である。番組は「ズバリ言うわよー」（TBS）、「幸せって何だっけ」（フジテレビ）、「愛のエプロン 2005秋SP」（テレビ朝日）の三つである。三つの番組に対する回答要請は同じ内容であった。「この女性占い師をメインにした番組を制作する意図」、「局にどのような視聴者意見が寄せられているか。それらをどう受け止めているか。また、それについての社内議論はあったのか」、「占い師の発言は、〝占い〟を根拠にしたものか否か」、「『テレビ番組以外の場での彼女の活動や収入を、放送局が結果的に支えることになるのは問題ではないか』という意見に対する局の見解」である。

紙数の都合上「占い師の発言は、『占い』を根拠としたものか否か」に対するテレビ局の回答を示すと以下のようになる。「この番組は細木氏が日本各地で開いてきた勉強会（悩み相談）の経験がベースになっており、細木氏による『占い』ではなく、その勉強会で培った『人生観』が発言、番組主旨の根拠になっております。したがって、『占い』により番組を構成、進行しているものではございません」（TBSテレビ）、「細木さんには、世事に対する経験を生かしてコメントをしていただくことで希望と勇気をもってもらいたい、という番組の企画意図に基づいてご出演いただいております」（フジテレビ）、「細木氏の発言は三時間の番組中、ほとんどが料理バラエティ番組における細木氏の料理に関する発言であり、基本的には占いに基づくものではなかったと考えております。占いをもとに発言したのは『料理占い』というコーナーのみで、その内容も細木氏の占い理論に沿って、どんな料理を食べたら運気が上がるかなどを出演したタレントに告げるというものでした。これらは公序良俗に反するものではないと判断しております」（テレビ朝日）。放送局の回答は、どのように好意的に捉えても、詭弁としか思えない。

番組審議会の形骸化

局内の番組審議会で取り上げることを約束したのはTBSテレビだけだった。審議会は要請のあった翌月に開催された。ホームページに掲載されている議事録を読んで二度驚愕した。

最初の驚きは審議会での予想外の批判であった。「細木さんが、なぜ説明も占いのプロセスもなしで、『西郷さんが大殺界に入ったから自殺する』という方に持っていくのか、まったく理解できなかった。もし本当に人生相談ならば、『自殺』という言葉は出さなくても、さまざまな材料から辛口のコメントをすることはできたはずだ」、「既にBPOから出されている要望書（「血液型の取り扱い」など）も、制作者はどうか頭の片隅に置いてほしい。かつてTBSで起きた問題の時も、いろんな指針が出来たが、形の上だけでは余り意味がない」（二〇〇五年一一月二一日／第四八一回番組審議会）。今一度の驚きは、批判が相次いだにもかかわらず審議会に結論がなく、番組が現在まで同じ調子で（と筆者は思っている）継続されていることである。加えてBPOは、そうした放送局の対応に対して、さらなる回答や要望を求めないのである。だとしたら、要望書も審議会も必要ない、と思うのは私だけだろうか。

フジテレビは「メディア検討小委員会」での検討を回答したが、委員会での議論はHPでは公開されていない。テレビ朝日では検討された様子がまったくみられない。

細木数子をめぐるトラブルはまだ続く。「幸せって何だっけ」（フジテレビ・二〇〇五年一一月一一日）で大失言をしたのである。番組の中で細木は鶏卵の価格の安さを批判して、養鶏場では二四時間明かりをつけ一日に二、三個も卵を産ませている、ほとんどが薬でつくられている、などと事実とは異なった発言をしたのであった。細木の発言に対して、日本養鶏協会や日本卵業協会など養鶏業界一一団体が連名でフジテレビに抗議を行った。フジテレビは謝罪し、翌年一月に訂正番組を放送した。

インターネット上では、細木数子の失言や当たらない占いは今に始まったことではないというホームページが複数存在する。谷という姓になったら田村亮子は金メダルをとれない、ライブドアの株価が五倍になる、二〇〇六年のセ・リーグは阪神、横浜、巨人が優勝争い、小泉さんの次は武部さん、など知られているだけでもかなりの数に上るという。

超能力番組への不思議な寛容さ

細木数子やその他一連の非科学的事柄に関する番組を見ていて不思議に思うのは、無関心の存在である。血液型性格判断の番組では、一部の視聴者が子どものいじめを訴えて番組の中止にいたったが、大半の視聴者にとっては、なぜ問題となるか理解できなかっただろうし、そもそも理解すらしようとしなかったのではないか。占いについても、多くの放送局で頻繁に流されているように、一部の視聴者を除いては、かくだん事を荒立てる必要のないものである。日本PTA全国協議会は毎年「子供に見せたくない番組」を公表しているが、取り挙げられている番組は性と暴力に関するもので、非科学